

第4回 岳北地域の高校の将来像を考える協議会 (会議録概要)

日時：令和元年8月7日(水) 16:00～

場所：飯山市役所 4階 全員協議会室

1 開 会

定刻になりましたので、第4回岳北地域の高校の将来像を考える協議会を開催します。進行を務めます飯山市教育部長の常田でございます。よろしくお願いいたします。

2 あいさつ

足立会長)

お疲れさまです。本日は第4回目の協議会となりますが、県教委からこの地域の高校の存続形態について、どのような形が考えられるかということを中心に説明いただきます。

それでは本日もよろしくお願いいたします。

3 協 議

(1) 長野県の高校再編における岳北地域高等学校の存続形態について

長野県教育委員会高校教育課 高校改革推進係 駒瀬係長より説明

日臺副会長)

先程説明があった、統合して新しい高校をつくるという場合ですが、資料でいうと、新しい高校はキャンパスが一ヶ所となつていますが、必ずしも校舎は一ヶ所でも良いという事ですね？キャンパス化というのは、1つの高校だけ校舎が複数あるということによろしいですか。

県事務局)

再編整備計画というのは、学校規模が縮小していくと統合という事でありますので基本的には1つの学校になるという捉え方をさせていただくのがよろしいかと思ひます。

足立会長)

地域キャンパス化というのは、今ある犀峽高校はもちろん、中条高校も、1つの学校だけど、校舎間の距離が離れているので、日常的に、その日のうちに生徒や先生が往来することができない。そのため、独立した教育をしている分校ということですね。ただ、その分校も規模が小さくなれば、存続は難しいですよ、という説明だったと思ひます。もう一つ、今、日臺副会長からも意見がありましたが、生徒数が減っているから、新たな高校を作るとした場合に、すでに飯山高校は3校が統合し開校間もないですよ。

飯山北高校の敷地に、新しい校舎ができたばかりなので、例えば下高井農林高校と統合したとして、県は、また、どこか新しい場所に校舎を建設するのかというと、それが、現実的には難しいので、そうした場合に、キャンパスを2つ。飯山高校と下高井農林高校とで5学級くらいは確保できるわけですから、当面、その方向性が現実的なのかな、そういう説明なのかなという思ひはあります。

さらにもっと言うと、生徒数の推計から少なくとも、今後 15 年くらいは 4～5 学級が維持できるということですから、そのあたりを県教委も考えるわけですね。

県事務局)

新しい学校をつくるということで、新しい校舎をつくるということではありません。

足立会長)

新しい学校は名称としてできる、で、校舎については、現時点では、必ずしも絶対1つでなくてもよいということではないでしょうか。

県事務局)

いけないということではございませんが、1つの学校になるという事は、それぞれの学校で、どのような学校づくりを目指していくのかということ、教育課程を考えると、飯山北高校と飯山高校の統合を経て、時間がかかる中で少子化も進行しているという現状もございます。

足立会長)

ほかに皆さまから、いかがでしょうか。

飯山市教育部長)

それでは、質問等ありましたら、また協議の中でいただけたらと思います。

では次の協議に入りたいと思います。協議の進行につきましては会長にお願いします。

(2) 今後の両校に望まれる学びの姿について（意見交換）

足立会長)

それでは今、県教委からの説明を聞いたわけですが、今の説明で不明な点、ご意見等ありましたらお願いいたします。

この会は地域の考え方を県教委へ出す場ですので、私としますと、県教委は「現在は、こうした方針を考えています」ということで、我々もそれに対する意見・要望をしっかりと出して、盛り込んだ内容で県へ出していきたくと思いますが、説明へのご質問等いかがでしょうか。

長瀬 飯山市教育長)

質問よろしいでしょうか。私は下高井農林高校を残したいという思いの前提で質問いたします。

まずキャンパス化にして生徒募集した結果、生徒が集まらなくなれば、募集停止して分校は廃校になるという事でしょうか。

もう一つは、下高井農林高校を地域に残すために飯山高校と統合し、飯山高校の中の一つの学科として残すことは、募集定員を下回っても絶対に残るといえる事でしょうか。

県事務局)

あくまでも想定という事でお話しさせていただければと思います。今、下高井農林高校と飯山高校とが一つの学校になった場合、先程お示しましたように、普通科が2学級、探究科が1学級、スポーツ科学科が1学級、さらに農林高校の科が2学級となつてまいります。そうなりますと、新しい高校の学科として考えた場合、生徒数が減ってくれば、学科そのものがなくなるということもあります。

かたや地域キャンパス化は、ギリギリまで残せるといいますか、生徒が定数 60 人を下回る年が 2

年続くと廃止という条件もありますが、少子化が激しく進む中で、どちらがよいかというのは言いにくい部分がございますが、中条高、犀峡高のあり方を見ますと、地域に教育の場の保障というのもあります。一つになったらキャンパスがなくなるのか、はっきりしたことは申し上げられませんが、地域キャンパス化の方が、ギリギリまで残る、残せる方策とは思いますが。

長瀬 飯山市教育長)

ということは、飯山高校の学科の1つにして下高井農林高校を残すという事は、可能ではないという事ですか。

県事務局)

先ほども申し上げましたように、学科そのものを再編することになります。

長瀬 飯山市教育長)

飯山高校の学科も含めて再編することで、減らすところを減らし、両方を残すことも可能になるという事でしょうか。

県事務局)

飯山高校の学科再編となれば、飯山高校に空き教室も出てきますので、そうすると、校舎が複数個所に分かれているという事は不便ですので、そうした場合には校舎は1か所で農場だけは残すというようなことにもなるかと思えます。

長瀬 飯山市教育長)

今の学校の場所で授業を受け、生徒会や部活動を一緒に行うというのが自然の流れのような気も致しますが。私個人では下高井農林高校は残すための方策を考えていく事が、この地域にとって良いことのような気がします。キャンパス化が良い、と言われていても、生徒が集まらなければ募集停止だという流れに持っていかれると困ってしまいます。

県事務局)

それは想定しておりません。

長瀬 飯山市教育長)

しかし現実的に生徒が集まらなくなった場合、キャンパス化募集停止して農林高校なくすという流れになってしまうのでは。

県事務局)

キャンパス化にした場合でも、中山間地存立校にした場合でも、人数基準はあります。その基準を適用してどうしていくかということになるかと思えます。

クラブ活動にしましても、先程、足立会長がおっしゃったように、校舎間が離れていますと、犀峡高や中条高のように一緒に活動するのは難しいという現実があります。当初、県としましても、そのようなところを、もっと連携しながらと思っておりましたが、距離が非常に離れているという事で、お示しましたように連携が取れずに独自にクラブ活動等を行っているという状況でございます。

足立会長)

中山間地存立特定校というのは、要するに高校教育の場を与えること、生徒の数だけの統合では

高校教育ができなくなる、不便な場所については特別に存続を許可しますという、教育機会の確保の観点からですよね。近隣の高校から著しく離れている、という点については、飯山高校と下高井農林高校とは5キロほどしか離れていない。1日の中で移動できない距離ではないではないか、と思います。

大事なのは、下高井農林高校で農業・林業といった内容を学べる設備・施設があるんですけども、一つの学校というよりもこれからの学びのなかで、そうした学ぶ場があるというのが大事なことだと思います。

教育長から話があったように、そうした点は、やはり地域として残すという方策を考えていく事が大事ではないかな、そうでないと、地域キャンパス化というと、言い方がわかりづらいかと思いますが、飯山高校と下高井農林高校とでは機能が違うわけですから。飯山高校の分校で普通科も教えるというような、この地域の教育としての特徴と言いますか将来を考えた時に、教育の機会を与えていくような方策を考えなければと思います。

皆さまから、ご質問・ご意見はいかがでしょうか。

伊東副会長)

経済界とすると、この地域から高校が一つなくなるという事は大問題です。

地域がますます疲弊する道をたどっていくことが予想され、やはり教育長がおっしゃったように、この地域に高校を残すというのが基本かなと思っております。

それぞれ行政もそうですが、いろいろ減ってくれば見直したいというのは行政の長であれば、県であろうと地域であろうと考える事かと思いますが、我々ではできるだけこの2校を残すという道を考えている中で、県教委は、最終的に県全体の中で決めていく事だろうと思いますが。それから行政がそれぞれ人口増対策の中で真剣に取り組んでいるわけですから、減るだろうという前提の中で動いていますが、どうやって人口を増やして高校を存続させるかということも含めて考えていただきたいなと思います。

小林 木島平村教育長)

よろしいですか。昨年の9月に県教委から高校改革の実施方針の第二通学区の中で、地域キャンパス化により地域が連携した学びの場の構築を構想していく事が考えられる、と謳われているわけで、この地域キャンパス化となると、私も2高は大事な学校であり必要であるという前提で話させてもらおうと、地域キャンパス化の場合、たとえば農林高校は残る、そうした場合、教育課程は農林高校の教育課程、そしてまた飯山高校は飯山高校の教育課程、別々の教育課程になるんですよね。だから、先程の資料からいいますと、飯山高校はたとえば現況からいいますと探究・普通・スポーツ、農林高校はグリーンデザイン・アグリサービス、そうした別々の教育課程であり、生徒会も別であると。そうした独自のところで教育活動が行われていると。そしてクラブ活動など高体連も別々で行くわけであり

しかし分校化ということでもありますので、例えば飯山高校に校長がいれば農林高校には副校長がというようなことでもありますので、2キャンパスとなりますと、飯山高校キャンパス、農林高校キャンパスとなりますと、同じ教育課程の形でやりますということになる。そうすると分かれていても生徒会は同じ、また部活動も同じというようなこととなります。そうなりますとやはり、地域キャンパス化の再編自主方針計画にも謳われておりますように地域キャンパス化というような形で、両校の独自性と言いますか、カリキュラムで進んでいくということが、高校を残す、そして子ども達が目的をもって入学し、地元への定着率、下高井農林高校は地元への定着率が過去五年間で78%ほどありますので、卒業生の動向を見ても、前段説明いただいたような内容が私は望ましいのではないかと私は思います。

足立会長)

ほかにいかがでしょうか。

高橋 飯水中学校長会長)

本日示していただきました資料9ページに、旧第一通学区の再編計画の方向性というのがありますが、やはり中学校現場に勤務するものとして、そこに書かれている一つ目「中学生の期待に応える普通教育と専門教育の学びの場を確保していく必要がある」と明記されています。今の飯山高校甲子園出場もそうですが、この岳北地域に生まれて学んできている子どもたちの期待・夢がなくならないためにも、今回の飯山高校甲子園というのは非常に大きな影響があると思います。先ほどから話に出てきておりますけれども、この地域の中で生徒数の減少によって、飯山北高校、飯山南高校、飯山照岡高校が統合されて発足された飯山高校。その中で、今回の野球部、吹奏楽部の活躍、また、スキー部も活躍してくれるでしょう。子どもたちが小学生も中学生も夢をもって、この地域に期待している。その期待を裏切るようなことがあってはいけない、というのが、考えていく事だと思えます。

一つ心配なのが、先ほど、人数ありきで、すべて縮小されて、必要なくなったものは存続できないからやめてしまおうという事は、今、夢をもっている子ども達にとっては、暗い話題になってしまう。それでは自分が求める学びの場がどこなのか、ということになると、都市部と言いますか、たくさん人数がいて、教育環境が整っているところへ行けばできる、そうしたところへ行かざるをえない環境を作ってはいけないと思えます。だから、人数ありきでということ考えた時に、県教委でも全国的に少なくなってきている子どもたちの夢を持ち続けられる、期待に応えられるような高校の在り方というのを考えてほしいなと思っています。

人数が減ったから高校の募集停止、進学先は大都市にしなければいけない環境など、この地域に生まれて損をしたなと思う事がないように、これからの再編計画を求めていきたいと思えます。

足立会長)

ほかに、どうでしょうか。

森重 栄村副村長

栄村の森重です。今年はじめに出席させていただきましたけれども、説明をお聞きして、まず思ったのは「何のための再編なのか」ということ、もう一つは「再編することのメリット、デメリットはなんだろう」というようなことを考えました。

私の考えを述べさせていただきたいと思いますが、「何のための再編か」という点については、効率化というものがあるのかなと感じます。なるべくお金をかけずにまとめて、ということは想定されていると思いますが、それをやってしまうと、学びたいことを学ぶ機会を奪うことになるのではないかと、思います。先ほど、高橋校長会長もおっしゃっていましたが、人数ありきでラインを考えてしまうとそうなるのでは、と思います。それが一点目です。

それから、地域のニーズや実情を踏まえたうえで議論すべきじゃないかと思えます。長野県は広いので、それぞれの地域の特色ある教育をくんでいただけのものと思えますが、これまで北信地域の教育が培ってきたもの、そうしたものを考えた時に、再編ありきの議論は、地域の意向をないがしろにしていないか、ということをおもいました。

三点目に思ったことは、飯山高校、下高井農林高校へは栄村からも子どもたちがお世話になっておりますけれども、それをさらに魅力ある学校にするためには、校長先生はじめ教職員の皆さまが、教育に対する確かなビジョンをもって、取り組んでもらう事が大事ではないかと思えます。要するに「教育の質」というところでございます。そうしたところで、飯山高校、下高井農林高校には、ぜひ期待したいなという思いがございます。

それから四点目、最後になりますけれども、基本的には私も現在の2校のままでという思いがありますけれども、今、子ども達の学びというのは、全国的にみても多様な学びを保障する取り組みが行われております。今日の説明の中には出てきませんでしたけれども、やはり「生きる力」というのがこれから必要であろうと思います。「生きる力」というのは非常に漠然としておりますけれど、これは先ほどの県教委からの説明内容に関わることもかもしれませんが、一つは「知識」ですね。知識偏重社会・教育から脱皮するところの知識。それから「徳育」。こころのことだと、ご理解いただければと思います。あとは「身体」。

知育、徳育、体育。バランスよく取れてこそ、生きる力として必要ではないかと。

どこで保障できるかという、学びたいことが学べる、そうした場が地域にあるという事が前提ではないかと思えます。そうしたことを考えながら、お話を聴いていましたが、まさに今、再編という大きなテーマの中で、これからの北信の教育がどうあるべきか、ということも、併せて考える必要性があるのではないかと感じました。以上でございます。

足立会長)

ありがとうございました。ほかに、いかがでしょうか。

野沢温泉村 岩上教育長、どうでしょうか。

岩上 野沢温泉村教育長)

飯山高校と下高井農林高校を残していく前提で考えたときに、生徒数の減少が推計値として見えています。すると、これから数年間は、少なくともこの推移で保てるだろうと思えます。ある時から維持が難しくなります。たとえば今の飯山高校 40 人 5 クラス。これを下高井農林高校の生徒数が減ってきて維持できないのであれば、学科再編の中で1クラス分を下高井農林高校へ確保するような、中学校との連携の中で。みなさんの気持ちの中に残すというのがあれば、5-6 人であっても残すためにどのような形態がとれるかという具体案を県が示してくれたらよいのですが。この地域の皆さんが両方残したいと言うのであれば、こうしたら残りますよ、というような。このようにしたら少なくとも何年までは残せる、その後何年からは厳しくなるが、残したいのであればこうしたら残るというような。飯山高校の生徒数が増えるという事は、下高井農林高校の生徒数が減るという事です。県全体の中でも私立高校の定員を守るために、公立高校の定員数を増やさないようにしていますよね、それと同じように、下高井農林の子ども達がいなくなるとは困るので、閉じざる状況にならないように、飯山高校の定員数を、こうした言い方は申し訳ないですが、同じ地域なので調整していただいて、残せるようにしていただきたいなと思えます。

こうしたら 2 校存続できるというような案を、県教委も一緒になって、奥信濃の地で農業を担う子どもたちを、これだけの土地、田畑があるわけですから。下高井農林高校がなくなったら、荒廃地がでてくることも目に見えています。野沢温泉村もそうです。大きな土地はないけれども、田畑を必死に耕している方々があります。下高井農林高校がなくなったら農業後継者というのがさらに減ってしまうと思えます。狭い地域ではあるけれども、そのなかで田畑を荒らさずに守っていくためにも下高井農林高校は残すと。残すためにこうした人数で、飯山高校との連携の中でこうした方法が考えられると、県教委へ意見としてあげるのだとすれば、感覚的に残したいという思いだけでなく、数が減ってくるから減らしますよという論理でもなく、でもそれはわかるけれども、抽象的・感情的なものだと思います。下高井農林高校での教育課程は特殊な内容ですので、具体的な数字を見ながら、県教委にも入ってもらい、8月、9月で、今出ている方針とは別の案を考えてみたらどうかと思います。そうしないと、残したいという思いだけでは次回も同じような議論になってしまうのではないかと思います。私も村へ戻って、次長たちと案がないか考えてみたいと思います。

足立会長)

小林教育長、いかがですか。

小林 木島平村教育長)

子どもの人数が減るという現実はある、存続のための地域キャンパス校と、中山間地存立特定校という案がありますけれども、2校存続を考えるのであれば、流入人口と言いますか、生徒数を増やす対策も必要かと思えます。農林高校も長い伝統を持つ中で専門性ある高校ですし、飯山高校のスポーツ科ではスキーや野球といった実績も残していますし、探究科では進学率が高い等、特色をもっていますので、そうした特色をさらに高めて、可能な限り可能性を研究していかなければならない、それによって、入ってくる子ども達を増やしていかなければならないと思っております。また現実的に申し上げまして、私は地域キャンパス化と中山間地存立特定校の2点に絞って、研究していくのでどうか、と思っております。

足立会長)

予定の時間まで、まだ少しありますが、いかがでしょうか。

森重 栄村副村長)

先程、野沢温泉村の教育長がおっしゃったように、総論賛成、各論になると見えない、なにをすべきか、となってしまう。ヒントになるかわかりませんが、島根県の沖ノ島の高校で、生徒数の減少から廃校議論になったときに、その高校が取り組んだことは、学校だけで頑張っても駄目で、そこに地域と行政がタイアップしたんですね。周りが海で海産物が豊富にある、それを高校生たちが商品化していこうということになり、そこに漁業者が加わり、行政が支援し取り組んでいきました。

地域創生基金という特色ある取り組みをするときには国から補助金ができる、アイデアがあればいくらでもお金をだす、地方公共団体は地方交付金・補助金に頼るだけではだめで稼げ、と盛んにいわれた年にあって、特色ある学校を作ったことにより学校が楽しくなった、それが生徒減に歯止めがかかり、さらには本土から島へ高校生が行くようになった。同じことが、この地域でも言えないのかな、と思いました。本当に魅力ある学校づくりを下高井農林高校と飯山高校がしたときに、子ども達が「遠いけど、あの学校へ行ってみたいな」と思わせる取組。それが教育の質だと思うのですが、そうしたのが発想としてあれば、データの人口が減ることはわかりますが、それを食い止めるために地域も協力して、長野方面などから子どもたちを惹きつけるのではないかなと思います。知恵とアイデアを駆使しなくては数字だけを追ったのでは解決にはならないので、そうしたことも研究をしていく必要があるのではないかなと思います。

足立会長)

本日、県教委から説明いただいて、それぞれ皆さんからもご意見をいただいたわけですが、岩上野沢温泉村教育長、森重栄村副村長の意見にもございましたように、もう少し具体的な方策を詰めていく必要があるのではないかと感じました。そのためには施設だけでなく、教育内容を地域として考えていく必要があるのではないかと思います。本日は基本的な情報をいただく中で、いろいろご意見をいただきましたので、次回はもう少し深い論議ができますように、内部でも事務局等と詰めさせていただき、具体的にこのような方法はどうか、というようなことについて、たたき台のようなものをいくつかお示していければ、と思っております。

岩上 野沢温泉村教育長)

下高井農林高校、飯山高校、それぞれの学校で、外からの生徒を惹きつけるような魅力ある学校

づくりについて、論議されているか、お聞きしたいのですが。

横澤 下高井農林高校長)

下高井農林高校は非常に危機感をもって議論をすすめています。確かに旧第一通学区だけをとつても生徒たちは非常に多様なニーズ、多様な特性があります。例えば、大きな集団に入れないというような。そうした多様な特性に応じて、さらに魅力を高めて外からも生徒が来てくれるような学科の構成がどうあるべきか。急務として取り組んでおります。

林 飯山高校長)

飯山高校は統合4年目となり、ようやく落ち着いてきたところ。3つの学校と、それぞれの生徒が集まってきているような学校で、飯山北高校とも違う、飯山南高校とも違う、そうした生徒の集まりの中で、4年目にして、なんとなく先生方もそれぞれの生徒への対応というものをしているところです。

SSH(Super Science High school)の指定もありまして非常に忙しい中、先生たちも魅力ある学校となるよう取り組んでいるところでありますし、探究科という先取りした教育においても、魅力を打ち出そうとしております。しかし具体的に外からとなると、まだありませんが、研究は進めているところです。

足立会長)

本日は議題(2)の学びの姿についても意見が出てきたかなというところでありますけれど、本日のそれぞれのご意見を踏まえて、次回もう少し踏み込んだ論議ができましたらと思います。

それでは本日は閉会とさせていただきます。

4 その他

・次回開催日程について 8月28日(水)午前10時～

5 閉会